

1517年、M.ルターは「95箇条の提題」を公にした。それが発端となり、宗教改革に拡大していくのだが、その第一条に注目しよう。

「私たちの主であり、師であるイエス・キリストが〔あなたは悔い改めなさい…〕と言われた時、彼は信じる者の全生涯が悔い改めであることを欲し給うた」。つまり日毎の悔い改めだ。

人間、そんなに悔い改めてばかりいると、いじけて卑屈にならないのか。ルターはそうではなかった。エネルギーで、どんな危機に陥っても、どことなく明るいところがあった。

「悔い改め」の原意は「方向転換」だが、ルターのように明るくなる悔い改めとは、いったいどのようなものなのか。単純だ。「神に忠実でないこと」を悔い改め、「忠実であるよう」に方向転換すること。神への忠実とは、実際どうあればいいのか。全生涯が悔い改めになったら、息が詰まらないか。

「恐れるな、わたしはあなたを贖う。あなたはわたしのもの。わたしはあなたの名をよぶ(イザヤ43:1)」。この真実に忠実であるならば、恐れることはないだろう。だが折々、誘惑や脅迫を恐れている。

私たちは己が名を呼ばれるほどに、漏れなく、神の所有であることは真実。しかしそれでも恐れている。

「水の中を通るときも、わたしはあなたと共にいる。大河の中を通っても、あなたは押し流されない。火の中を歩いても、焼かれず、炎はあなたに燃えつかない(43:2)」。

どんな状況に陥っても、神は共にいて、私たちを守り給う。であるにも係わらず、私たちは揺れ動き、勝手に恐れている。

一般の世間の評価も、自己評価も当てにならぬ。神の目に私は、値高く、貴く、特別に愛されている(43:4)。皆さんは、世間の目と、自分の目と、神の目の、どれを信頼するのか。何が確かなのか。

世間に翻弄され、自分で混乱している幻想を丁寧に見極めてほしい。そして、悔い改め、神のまなざしへと方向転換したい。悔い改めは縮こまることなく、のびのびと解き放たれることなのだ。

「愛には恐れがない。完全な愛は恐れを締め出す(1ヨハネ4:18)」。このキリストの完全な愛は、私たちの内で、私自身と響き合って全うされる(4:18)。「わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったから(4:19)」。

それでは、どれほど愛して下さっているのか。天の高い所におられず、私の隣人としてやって来て、私自身となって弱さと罪を負い、十字架で私の代わりに死ぬほど、完全に徹底した愛だ。恐れの原因など、この完全な愛によってもうすべて消滅しているではないか。

現在ここにいる私、神を蔑ろにして来た過去の私、日毎に悔い改め、日毎に背くであろう未来の私。これらすべてを、ひっくるめて愛されている。

モノも、人間関係も、実績も、属性も失って、やがて死に赴く私。私は死の中であってさえ、愛される。家族も、教会の兄弟姉妹も、そのように愛される。

愛がこれほどに明らかであっても、私たちは恐れている。どうしてか。人間の不完全な何か、名誉や財産、友情や競争心に目移りしているからだ。それゆえ、ルターが言うように、全生涯において日毎に悔い改め、神の愛へ方向転換することが求められる。そこに「キリスト者の自由」が生じる。

方向転換したなら、もうそれだけで充分だ。神の愛は、ほら、目の前にたっぷり溢れているから。



《おまけのひとこと》

悔い改めは方向転換 転換したらどうなるか 鏡のごとく右が左になり 左が右になる いや鏡で見
ていたものが現実に戻る と言うべきか 不可思議は 上は上のまま 下は下のままであること